行動選択が道徳的評価を変えるのか：道徳的ジレンマ課題における不確実性の影響

Does choice of action change moral evaluation?: Uncertainty in moral dilemmas

服部 郁子
Ikuko Hattori

立命館大学
Ritsumeikan University
iht23083@pl.ritsumeikan.ac.jp

概要

判断や意思決定を行なう際，人は意識的あるいは無意識的に状況の不確実性を考慮に入れる．不確実性の考慮には, 何らかの確率計算を必要とする. 本研究では, 道徳的ジレンマ課題を使って，他からの援助的介入の可能性という不確実性情報が，行動選択とその行動の道徳的評価に対してどのように影響するのかを調べた. 実験の結果は，多数のためには少数の犠牲を道徳的に容認できると評価することと，実際にその行動を実行すると判断することの間には乖離がみられた．他からの援助的介入の可能性という不確実性情報は人の行動選択だけでなく, 容認性評価にも影響した. この結果を道徳判断の二重過程理論の観点から議論する.

キーワード：二重思考過程 (dual thinking process)，道徳判断 (moral judgement)，不確実性 (uncertainty)

1. はじめに

2020 年 2 月クルーズ船ダイヤモンドプリンセス号内で起きた新型コロナウィルス感染症（COVID-19）の集団発生は, 船内隔離という措置を取ることによって, 乗船者 3711 人中 712 人が感染するという結果[1]をもたらした. 隔離期間が長引いた背景には, 乗船者を早期に下船させることはウィルスの国内への急速な拡散につながり，より多くの感染者を生じさせることになるかもしれないという懸念があった．この措置が妥当であったかどうかは船内環境や現場の医療体制など様々な状況を含めて検証される必要がある. しかし, 多人数に及ぶ潜在的危険性を放置するか, それとも, それを避けるために相対的に少ない人数を犠牲にするのか，これは誰から見ても「正しい」答えがある問題ではなく，判断を下すのは容易ではない．隔離措置を実施した担当者たち, それを報道で見ていた人の中には, 原因も治療方法も不明のウィルスでは隔離措置は「仕方がない」と判断する一方で，それが「いいこと」だとは感じられないと思った人もいたのではないだろうか.

2. 道徳判断の二重過程理論

このような道徳的ジレンマ問題に直面したとき，取りうる行動の選択肢の中から何を選択し実行すべきだと判断することと，その行動が道徳的に容認できると感じることの間には乖離が生じる場合がある [1,2]. つまり, 少数の人を犠牲にすれば, それよりもっと多くの人々が助かるというような状況がある場合，少人数を犠牲にしてでも多数を救うという行動をすべきだと考える人がいるとする. しかし, この人がその行動を道徳的に容認できるものだと感じるかどうかどうかは，行動の選択とは必ずしも一致するとは限らない．Greene らの分類にしたがって，大多数を救うには少数の犠牲は仕方がないとする見方を功利主義的判断 (utilitarian judgment)，たとえ少数であっても人の命を恣意的に犠牲にすることは許されないという見方を義務論的判断 (deontological judgments) と呼ぶ[1, 2].

思考の二重過程理論では, 人の認知は, 素早く，認知的負荷が低い, 直感的思考（タイプ 1／システム 1）と，遅く，認知的負荷の高い，熟考的思考（タイプ 2／システム 2）の相互作用によって成り立つと説明する[3, 4]. 道徳判断の二重過程理論によると，義務論的判断は直感的思考と，功利主義的判断は熟考的思考と結びついているという[1, 2]．つまり，行動の選択が分析的な熟考的思考に基づくのに対して，その行動が道徳規範に即した容認可能なものと感じるかどうかは直感的思考に基づく．人の思考の二重性が上述の乖離を生み出す要因であり[5]，それらは異なる神経基盤に依存する可能性が指摘されている[6].

また, 私たちは様々な判断や意思決定を行なう際, 意識的あるいは無意識的に状況の不確実性を考慮に入れ

1 国立感染症研究所. ダイヤモンドプリンセス号環境検査に関する報告（要旨）, https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2484-idsc/9597-covid19-19.html (掲載: 2020/5/3，修正: 2020/5/20).

る. 不確実性を考慮するということは, 何らかの確率計算を伴うことを意味する. もし義務論的判断が直感的思考と, 功利主義的判断が熟考的思考と, ダイレクトに結びついているのであれば, 不確実性に関する情報は分析的な熟考的思考に基づく功利主義的判断には影響するが, 直感的思考に基づく義務論的判断にはあまり影響しないと考えられる. さらに, 不確実性情報によって, 行動選択は変わりうるが, 道徳的な容認性の評価はあまり影響を受けにくいと予測される. 本研究では, 道徳的ジレンマ課題を使って, 他からの援助的介入の可能性という不確実性情報が, 行動選択とその道徳的評価に対してどのように影響するのかを調べた.

3. 方法

1. 実験参加者

193 名の学生が認知心理学の講義の中で実験課題に回答した. そのうち, 19 名を除く（課題文の状況理解に関する質問によく理解できなかったと回答した 10 名, 母語が日本語ではないと回答した 9 名）, 174 名を分析対象とした（女性 114 名, 平均 19.4 歳 (SD=0.8)）.

2. 実験条件

確率情報５条件（UNK／70／50／10／5％）（参加者間要因） と, 行為の**道徳的判断**２条件（容認性評価／実行性判断）（参加者間）を要因とする課題を作成し, 参加者は任意の確率条件に割り当てられた.

3. 課題と手続き

Tassy らの研究 [7] で用いられた課題を元に, 次のような道徳ジレンマ課題を作成した. 確率情報不明条件 (unknown) では下線なし部分の文章のみ, 確率情報あり条件ではそれに下線部を加えた文章が Web 上で提示された ([ ]は, どれか一つの確率と%のみ提示された).

あなたは, 海上保安庁の沿岸警備隊であると想像してください. ある船が難破して沈没しつつあるという連絡を受け, あなたは他の船員たちとともに沿岸警備隊の船で救助に向かっています. １人の船員が, あなたがキャプテンである沿岸警備隊の船から海に落ちました。 彼を救うために引き返すと, 沈没船に乗っている 10 人の船員を救うことができなくなります。救助には, あなたの船の他に, もう一つ別の船も向かっています. しかしその船は離れたところにいるため, その船が沈没船の救助に間に合う可能性は [70 / 50 / 10 / 5 %] です.

上の文章を読んだ後, 参加者は, 以下の質問に Web 上で回答した. （ ）は回答の選択肢を表している.

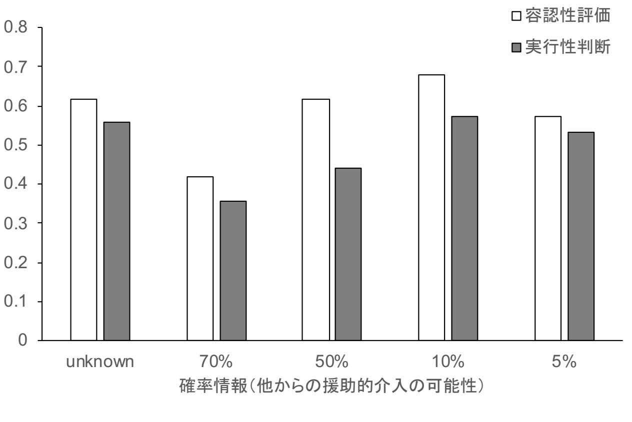
1. 10 人の船員を救うために, 1 人の船員を見捨てることは, 倫理的に容認できることだと思いますか？（いいえ／はい）
2. 実際にこのような状況になった場合, 10 名の船員を救うために, 1 人の船員を見捨てますか？（いいえ／はい）

上記の質問の他, 参加者は, 課題状況の理解, 年齢, 性別, 母語, 類似問題の経験についても回答した.

4. 結果

確率情報が不明な場合 (unknown) と極めて低い場合(5%) を除き, 他からの援助的介入の可能性が低くなるほど, 実行性判断の割合が高くなる傾向がみられた. また, その行動の容認性評価の割合も, 同じ二条件を除いて, 高くなる傾向がみられた. ただし, 確率情報による主効果には有意な差はみられなかった. 一方, 行動を実際に実行するかどうかと, それを容認できると評価するかどうかの間には有意な差がみられた[$F(1,169)=4.33, p<.05, MSE=0.68$] . 交互作用はみられなかった.

図１ 肯定の回答をした参加者の割合



5. 考察

実験の結果から, 多数を救うためには少数を犠牲にすることは道徳的に容認できると感じることと, 実際にその行動を取ることができると思うこととの間には, 明白な乖離がみられた. この結果は, Tassy らの先行研究の知見に一致する[7]. また, 確率情報が不明な場合と極めて低い場合を除いた他の条件では, 他の援助の可能性が下がるにつれて, 行動の実行性判断とその容

認性評価がどちらも上がることから，不確実性情報の考慮は人の行動選択だけでなく，容認性評価にも影響しうると考えられる．

不確実性の考慮には，何らかの確率計算を必要とする．今回の結果を見る限り，(少なくともいくつかの条件では) 不確実性が高くなるほど, 多数を救うためには少数を犠牲にすることはやむを得ないという功利主義的判断が，行為の実行性だけでなく道徳的評価においても増加した．このことは，道徳的評価，つまり，どのような行為が倫理的に許され，どのような行為は倫理的に許されないと感じるかは，単純に直感的思考に基づく反応ではないということを示唆する．

一つの可能性として, 行動の選択が, その行動に対する評価を後から変えているというメカニズムが考えられるだろう．つまり, 他からの援助的介入の可能性がある場合は少数を犠牲にするという行為を自分あるいは他者が取る必要性が低くなるため，その行動に対する道徳的評価を変える必要性も生じない．しかし, 他の援助的介入の可能性が低い場合には，自分あるいは他者が少数を犠牲にする行動を取らざるを得ないと判断することによって,「倫理的に許されない」という直感的思考による評価を「大義のためには許される」という功利主義的評価によって上書きするという認知的制御[1, 2]が, 行動の選択だけでなく, 行動の道徳的評価においても生じているのかもしれない．

もう一つの可能性として，直感的思考にはある程度の論理的計算が可能であり[8, 9]，それによって状況の不確実性を考慮するというメカニズムが考えられる．つまり, 道徳的評価は直感的思考に, 行動の選択判断は熟考的思考にそれぞれ基づくが，どちらの思考にも (少なくとも何らかのレベルでの) 確率計算が可能であり，そのためどちらの評価においても不確実性の影響がみられたという解釈である．

しかし，直感的思考にはどのような論理的計算が可能であるのかという点には注意が必要である．De Neys らのいう「簡単な」論理的計算の定義はあまり明確ではないように思われる[10]．直感的思考は，経験に培われた規則の集合であり, 直感的規則の生み出す反応は, 現実の推論や意思決定では分析的な熟考的思考の反応と同程度かあるいはそれ以上に効率的で正確な判断ができる[11, 12]．直感的規則による反応が，結果的に非常に複雑な計算式による解に近似していても別におかしくはない．見た目に簡単な規則であるかどうかと, それが直感的規則であるという議論は意味がない．

また, 今回の結果では, 確率情報が不明な場合と極めて低い場合が他の条件と異なる結果を示した．両条件はよく似た傾向を示しており, 確率情報がない場合, 他の援助の可能性をほとんどないものとみなすということを示唆する．しかし, この二つの条件がなぜ他と異なった傾向を示したのかについてはわからない．この点も含め，さらにデータを集めて検討する必要がある．

文献

1. Greene, J.D., et al., *The neural bases of cognitive conflict and control in moral judgment.* Neuron, 2004. **44**(2): p. 389-400.
2. Greene, J.D., et al., *An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment.* Science, 2001. **293**(5537): p. 2105-2108.
3. Evans, J. St. B. T. and K.E. Stanovich, *Dual-process theories of higher cognition: Advancing the debate.* Perspectives on Psychological Science, 2013. **8**(3): p. 223-241.
4. Evans, J. St. B. T. and D.E. Over, *Rationality and reasoning*. 1996, Hove, UK: Psychology Press.
5. McDonald, M.M., A.M. Defever, and C.D. Navarrete, *Killing for the greater good: Action aversion and the emotional inhibition of harm in moral dilemmas.* Evolution and Human Behavior, 2017. **38**(6): p. 770-778.
6. Schaich Borg, J., et al., *Consequences, action, and intention as factors in moral judgments: An fMRI investigation.* Journal of cognitive neuroscience, 2006. **18**(5): p. 803-817.
7. Tassy, S., et al., *Discrepancies between Judgment and Choice of Action in Moral Dilemmas.* Front Psychol, 2013. **4**: p. 250.
8. De Neys, W., *Conflict detection, dual processes, and logical intuitions: Some clarifications.* Thinking & Reasoning, 2014. **20**(2): p. 169-187.
9. De Neys, W., *Bias and conflict: A case for logical intuitions.* Perspectives on Psychological Science, 2012. **7**(1): p. 28-38.
10. Bago, B. and W. De Neys, *The Smart System 1: evidence for the intuitive nature of correct responding on the bat-and-ball problem.* Thinking & Reasoning, 2019. **25**(3): p. 257-299.
11. Kruglanski, A.W. and G. Gigerenzer, *Intuitive and deliberate judgments are based on common principles.* Psychological review, 2011. **118**(1): p. 97-109.
12. Hattori, M., et al., *Dual frames in causal reasoning and other types of thinking*, in *The thinking mind: A festschrift for Ken Manktelow*, N. Galbraith, E. Lucas, and D.E. Over, Editors. 2016, Routledge: New York, NY. p. 98-114.